

られない大嚢胞及び嚢腫状嚢胞が現われ、且小嚢胞の数もいちじるしく減りました。これは腔上皮の角質化をおこさず、又子宮にも認め得る作用を及ぼし得ない量の発情物質でも脳下垂体の LH の分泌を抑制し、その結果嚢胞は嚢腫化するものと解釈される。

出産後のハツカネズミ子宮に対するパラフィン注入の影響 (予報) 南 学 (九大・農・動)

出産後 1~2 日の哺乳中のハツカネズミ子宮に対するパラフィン注入の影響を調べた。パラフィン注入を行った 22 匹中 20 匹に哺乳中止が見られた。さらに、パラフィン注入によつて哺乳がとまり、乳仔の死亡した動物に新しく乳仔をつけても哺乳は再開しなかつた。対照実験として、注入パラフィンと同温度にあたためたリンゲル氏液を注入し、10 匹中 9 匹は正常に哺乳をつづけた。哺乳中止が起つたハツカネズミの出産後 2 回目の発情期の到来時期は 6 日目から 29 日目までにまたがり、不規則であつた。子宮内膜は発達が悪く、子宮筋層はよく発達していた。哺乳を中止した動物の乳腺は正常哺乳のものに比較して、出産後 6 日目には退化の兆候が見られ、出産 14 日目では乳管のみで、終胞はわずかに認められる。ハツカネズミに於て出産後の子宮の人為的拡張は哺乳中止を起すと考えられる。

繁殖期及び性週期におけるハムスターの腔脂質試験 矢崎幾蔵 (香川大・学芸)

14 匹の雌ハムスターにつき普通の方法で繁殖各期に smear をとつて毎日調べた結果、次のことが判つた。即ち、粘液分泌細胞の出現を目標にするとほぼつきりした 4 日の週期性が認められること。粘液細胞、角質化上皮細胞、白血球の出現は受胎・妊娠・分娩・哺乳・離乳等の各期に亘つてはつきりした特性的の出現・消失を示すこと、この動物にしばしば見られる非発情性、従つて sterility に対し妊娠媒尿の gonadotropin をもつて刺激すると角質化細胞の出現をもつて応ぜず、粘液細胞の出現をもつて反応することなどが判つた。又他のけつ歯類の smear と比較してみた。細かい点は香川大学研究報告第 II 部第 3 号に掲載の予定。

ウニ体腔液中の精子の壽命と受精抑制作用について 中島隆 (橋学苑)

タコノコマクラの体腔液の受精抑制作用について、その後更に次の様な結果を得た。(1) 体腔液の pH を補正しても作用は変らない。(2) 卵のゼリー層を除いても作用は同じである。(3) トリプシンで処理した卵にも同様の作用を及ぼす。(4) 精子の凝集や acrosome 反応は体腔液中でも起り、特異的な現象は見られない。(5) 体腔液中に長時間懸濁した精子も受精力を有する。同じ濃度に懸濁した場合、体腔液中の方が海水中より精子の壽命が長い傾向が見られたが、これは受精抑制作用とは別の factor によるもので、体腔液の pH が海水より稍低いことが原因である。

カキの精子、卵子に対する抗血清の受精抑制及び纖毛運動抑制作用について

富田軍二・一井昭五 (東北大・理・生)

カキの精子・卵子に対するウサギの抗血清を作製、沈降反応の抗元力価 320~640 のものを用いて検したところ、(1) これらの抗血清は 2560 倍に稀釈してもカキの卵子の第一卵割率を低下させる、種々の稀釈抗血清で一定時間卵子または精子を処理したものを海水で洗つてから受精させたものでは、この卵割率の低下の程度は小さい；(2) 抗血清処理をした卵子で卵割を継続したものでも早晚発生が止まり（モルラ期以前に）、結局崩壊する；(3) 抗卵血清は抗精子血清と同じく精子の運動を阻止する；(4) 両抗血清はともに抗筋肉血清以上の纖毛運動抑制作用を有する；抗卵血清のほうが抑制作用強く、640 倍稀釈でも効果があるが、抗精子血清よりも効果は小さい。

ニシン卵の精子活性化 柳町隆造 (北大・理・動)

ニシン (*Clupea pallasii*) の精子は海水中或はリンゲル液中で殆んど動かないが、成熟卵の卵膜表面、特